〈調査報告〉

真宗保育実践に関する研究
―大谷保育協会所属園の見学を通して―

平　野　仁　美

1. はじめに

大谷保育協会[1]（以下、「本協会」と記す。）は、1983年「ともに生きともに育ちあう保育を実践しよう」という「総合テーマ」を宣言した。それから25年間、時代の急激な変化やさまざまな社会環境にもゆらぐことなく、長い間保育現場に「総合テーマ」を発信し実践を支えてきた。そして、2008年8月に開催された第13回全国真宗保育研修大会において「総合テーマ」の根本であり原点である「本願」を表明し、「本願に生き、ともに育ちあう保育」を真宗保育理念とすることを宣言した。本協会は、「真宗保育理念の宣言[2]」において、理念から問われるもの[3]を説明し本願に触れた時の「真宗保育」の実践の意味を掲載した。

昨年筆者は、「真宗保育」の理解を深めることを目的とし、『真宗保育のあゆみ－大谷保育協会　社団法人設立30年－』（社団法人大谷保育協会2010年8月）を参照しながら、本協会で発行している『真宗保育』[4]（No.1～No.349）を基に本協会に加盟している約500の現場がつながりあい、保育実践を積み重ねるために、「総合テーマ」をどのように理解し、伝えられてきたのかを検討した。その中で、今後の課題として「真宗保育理念」を拠りどころとした保育実践について調査することをあげた。

本稿では、本協会所属園の保育実践見学を通し、「真宗保育理念」や

「総合テーマ」がどのように保育展開されているのかを観察し、真宗保育実践の内容を考察することを目的とする。また、保育現場で「真宗保育」の方法がどのように伝えられているのかを報告するものである。

2.「真宗保育」とは何か

(1)「真宗保育」について

本協会は、「真宗保育」とは何かを、この理念を具現化する1つの手がかりとして、「①できるだけ平易な表現」と「②真宗教義を中心とした表現」の二通から解説[5]している。

①としての「真宗保育」とは、「子どもが、そのままにいて安心し、安心している子どもと共にいることで、保育者が自らの矛盾と、人間として生きる本当の意味をしらされ、子どもも保育者も、自己の存在に喜びを感じる営みである。」と述べている。

②としての「真宗保育」とは、「宗祖親鸞聖人が明らかにされた教えを行信した念仏者の報恩行である。その行は釈迦の勧める諸善を修することを方便要門とし、弥陀の弘願真実を証することを目標とする。その根幹は、現生において歓喜地を証する浄土真実の教行証である」と述べている。

また、本協会が社団法人となった時の記念すべき第1号の『真宗保育』では、当時研究部長であった祖父江は、「保育現場で仕立てあげた問いに保育現場の中で答えるという保育実践と、実践によって自らの生きざまを問うという、過去を受けつぎ、現在を生きることで未来に関わっていく、もっとも現実的な歴史をうけつぐことであった」(『真宗保育 (1)』1982. 7. 20) と「真宗保育」について明記している。

以上のようなことから「真宗保育」とは、“ともに生きともに育つ保育”の実践であり、上下の関係なくともに同じ基盤の上に平等に立ち、人間として生きる本当の意味をしらされ、子どもも保育者も、自己の存在に喜び

を感じ互いが安心してともにいることで、心が開放されて、自ら学ぶことが始まり、相手も自分に影響してくれる間柄であったと気づかされ、どの人も大切な存在としてかかわり合って育つ保育だと考えられる。

(2) 大谷保育協会のめざしてきたもの

本協会の歴史は古く、江戸時代に端を発している[6]。江戸時代、お寺は子どもとの関わりを「寺子屋」という形で結び、お寺が積極的に子どもの教育・保育に携わってきたことは真宗大谷派の寺院の多くも例外ではなかった。明治に入りその活動は「日曜学校」へと移行し、さらに明治中期には、寺院立「幼稚園」の設立が次々とみられるようになった。また、農村寺院を中心とした農村託児所も発足し、これが現在の「保育所（園）」であると考えられる。戦後の混乱期、昭和30年代以降の高度成長期、保育の需要が高まる中、幼稚園、保育所はその時代のニーズを受け増え続けた。

本協会は、「寺子屋」時代から一貫して真宗の教えに基づく「人間尊重」ということを中心に宗教者の保育として活動し、1949（昭和24）年に蓮如上人四百五十回御遠忌を迎えるにあたり、宗祖親鸞聖人の教えにもとづく真の「人間教育」・「真宗保育」を実践するために「大谷派保育協会」として創設されたことが様々なところで伝えられている。

祖父江は、「本協会が生き続けているのは、保育を人間として生きる場として関わり、保育者ひとりひとりとしての私自身の生きる上での問題として問うという視点と姿勢を持ち続けているためなのです」（『真宗保育(1)』1982. 7. 20）と述べている。

本協会の歩みは、常に本質を保育の現場とともに追求し続けるものであったと考えられる。また、「人間尊重」・「真宗保育」の精神は、拒否しない、排除しないという一人ひとりの人間を尊重し、人間の集団生活を尊重することでもある。本協会が言う「ともに育ちあう保育実践」とは、御縁を得た人々が仏の教えとともに生きることで、心を開放させることができ自ら

も学ぶことが始まり、どんな相手も自分を影響してくれる間柄であったと気づかされ、どの人も大切な存在だと知らせていくことをめざして、本協会所属園の保育実践を支え続けているのである。

3. 真宗保育実践園の見学を通して

本協会には、約500もの幼稚園・保育園・こども園・その他施設などが所属している。さまざまな実践現場は、「真宗保育理念[7]」・「総合テーマ」のもと、保育、幼児教育の振興に寄与することを目的とし、活動をおこなっている。

本稿の対象園は、本協会愛知県O支部に所属するO市内の7保育園とした。今回、見学対象とした理由の1つは、愛知県には全国一、本協会所属の園[8]（68園）が有り、「真宗保育」が盛んな土地柄であるということである。2つ目の理由としては、対象園と筆者が以前から交流があり、本研究への協力や理解が得られやすい、また、筆者が愛知県在住であり研究環境が整っているという事である。

(1) O市7園の開設時期についての考察

今回見学に行った保育園の開設年次は、1948、1949（昭和23、24）年頃が多く、1964（昭和39）年開設となっているG保育園も創設は、1959（昭和34）年であり昭和20年代中期から30年代中期の約10年間に開設されている。この要因の1つに、第二次大戦後の1947（昭和22）年に「学校教育法」や「児童福祉法」が制定されていることを挙げることができる。

当時の保育所や保育について『保育学大事典』では、「保育所を所管する厚生省では、保育というのは、学校教育法の規定による幼稚園の保育と必ずしも同じであることを要しない。保護教育一般のことである。」また、

「働く母親を援助するための託児施設の必要性は、就学前児童の在り方を云々する議論の前に存在する。それは、教育という、いわば高度の要求を満たすに十分な人的物的設備のそなわることを要求するより以前、必要な場所にそれぞれが存在することをまず要求するのである。」(『保育学大事典』p5) と当時の考えを述べている。

本研究の対象園も同様の経緯を経て誕生し、約60年を超える保育の歴史を刻んできたのである。O市には7園の本協会所属園があり、常に交流しつつ「真宗保育理念」を追求しながら保育展開がなされている。児童福祉の所管的立場からすると「保育所」という名称が主であるが、当市においては、「保育園」という名称を使用していることや本協会においても「保育園」という名称を使用していることから、本稿では、「保育所」を「保育園」と明記する。

(2) O市7園の立地環境についての考察

O市における本協会所属7園は、経営母体である寺の境内もしくは、寺に隣接している。7園中4園は、城下町であったO市の中心部に位置しており、城の近隣に点在している。また、ここには三河別院があり、近辺に真宗大谷派の寺院が集中している。

戦後の混乱期から1955(昭和30)年代以降の高度成長期に保育需要が高まり、次々に寺が中心となり保育園が設立されたと推測できる。他の3園は、ややO市の郊外にあり、農村寺院を中心とした農繁期託児所として住民の要望によって設立され、これが現在「保育園」に移行していったと推測する。市の発展とともにD保育園、E保育園の周辺は住宅や工場などが建ち人口も増え、保育園の利用率も高く、地域の子育て支援の拠点として、保育園が果たしている役割は重要視されていると考えられる。

少子化の時代ではあるが、子どもを預けて仕事場に通いやすい立地条件があり、どの園も定員越えをしている。また、働く保護者のニーズを受け

入れ、どの園も早朝、延長保育を実施している。F保育園については、夜間22時まで子どもたちを預かっている。仏が見守るなかで家庭的雰囲気を大切にしているという保育内容は勿論だが、園が街の真ん中に位置し、商店街・住宅街の中にあるという立地環境であることが、利用しやすく保育ニーズが高い保育園となっていると考えられる。

(3) 見学した7園の特徴

1) A保育園の特徴

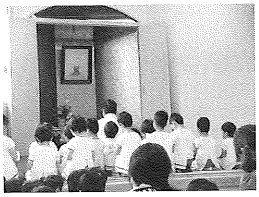
A保育園は、O市の中心部に位置している。三河別院の境内に設立され、お寺の中の保育園という意識を持って保育展開にも生かしている。強く宗教色を出す保育は考えていないが、お寺の中にあるという環境から自然に出てくるものは、保育に取り入れている。このことは、毎朝の"おつとめ"や行事時の三河別院参拝などが考えられる。真宗カリキュラムはベースに持っているがこだわらない保育展開を心がけている。A園の歴史は古く、1925（大正14）年、幼稚園として設立。戦時中は休園していた。そして、戦後新たに宗教法人として保育園を1949（昭和24）年1月に開園。1985（昭和60）年に社会福祉法人に切り替え現在に至っている。園長は、三河別院の理事の中から選ばれてA保育園に出向しており、市に準じて定年制をとり、定年になると運営理事体へ戻る。別院の他に住職を務める寺をもっている。

A保育園の特徴は、朝8：30から20分間行われるお参り（おつとめ）が日課となっていることである。園長を中心に年長児がステージ上に正座し、おまつりしてある聖徳太子二歳像にむかい御経をあげる。

4歳児から乳児たちも登園した子から園中心のホールに集まって参加する。

保育目標は、「つよく、あかるく、なかよくのびる」とし、生命尊重、報恩感謝、和合精進の3つの柱を立てている。

保育方針は、「人との関わりを大切にし、思いやりの心を育て、共に生



き、共に育ち合えるようにする。」とし、縦割り保育、横割り保育を生活や活動内容に即して取り入れ、乳児保育、延長保育も行っている。行事予定表から、4月「花まつり」、11月「別院報恩講」、2月「太子まつり」、3月「別院報恩講」が真宗の行事として挙げられる。毎月1度、「三河別院本堂参拝」をする。その他に、様々な行事が企画されているが、お相撲さんと遊ぶ会は非常に楽しそうである。

2）B保育園の特徴

B保育園は、O市中心部に立地している。園児入所定員は230人と多く、延長保育も行い、朝7時から夜7時まで開園している。

保育目標は、「仏の子として、強く、明るく、なかよくのびる」とし7つの目標をあげている。保育環境は、職員の手作りが多く、子どもたちの成長を願って構成され非常に温かさを感じる。

保育の計画を立案するときは、保育所保育指針も参考にしている。理由は、発達過程を踏まえた保育を大切にしているからである。保育園は人が育つ場であり、どの現場の保育も同じであるという考えが基になっているが、自園の保育内容の独自性は考慮している。園長は、隣接する寺の住職も兼務している。

お参りは日課にはあるが、保育者が中心となり一斉的に行うのではなく、お参りのために必要な念珠や御経の本なども保育の環境として設定されており、4・5歳児は、自主的に朝登園してくると遊戯室ステージ上にある

仏壇に手をあわせに行くのがＢ園の特徴である。3歳児や乳児は、各クラスで「仏様」の歌を歌うなどして自然に仏教保育実践がされている。

仏教的要素の行事としては様々な取り組みがある。「花まつり」は、4・5月に総会を兼ねてするため、保護者が参加して園内で行う。「秋のお彼岸」と2月の「報恩講」は隣接する寺の本堂で行う。「七夕」や「節分」の行事をしない「真宗保育」の園も多いが、Ｂ保育園ではあえて行っている。「七夕」では、願いだけで終わるのではなくその過程の内面の心の育ちを大切にしている。「節分」は、悪いものを排除するということではなく、誰もが持っている善悪の二局面の心とどう向き合うかを知るための行事として取り扱っている。

その他の行事として、毎月行う誕生会は、誕生児の保護者が希望して参加する。この時、食事も出される。また、ノーテレビデーを推進している点もＢ保育園の特徴の一つである。

3）Ｃ保育園の特徴

Ｃ保育園は、Ｏ市を象徴する城から1km程北に位置し、商業地域と住宅のいり込んだ自然や社会の事象にも興味関心がわく環境の中にある。

保育目標は、「●心身共にたくましく、よく遊ぶ子ども　●やさしい、思いやりのある子ども」である。保育方針は、「●子ども一人ひとりの思いを大切にする　●いろいろな体験の中で、意欲的に取り組む態度を育てる　●人や動植物との関わりの中で思いやりの気持ちを育てる」としている。保育の方針は、「（養護）子ども一人ひとりの様々な欲求を温かく満たし、生命の保持、情緒の安定を図る。（教育）人的環境・物的環境を通して「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域で発達の確認をしながら適切な援助をする。」である。保育の特徴は、"食育活動として野菜の栽培"、"年齢別のクラス編成"、"泥んこ遊び・水遊び"、"音楽遊び・造形遊び"、"お話の日"、"動植物に触れる"などの6つをあげている。カレー

ライス作り、ホットケーキ作り、焼き芋、クッキー作りなどの楽しい企画や異年齢で編成した「なかよしグループ」での生活の経験をする。また、プロの演奏者により本物の楽器や歌の音色に親しむクラシックコンサートもこの園の特色である。月に一度の"お話の日"には、本堂でお参りをし、「生き物を大切にする話」、「命の話」、「誕生＝命・心・体に関した話」などについて保育士が工夫して話しているのもＣ保育園の特徴である。また、社会福祉法人の園だから意識して、地域の様々な行事を取り入れた保育実践も行っている。

「真宗保育」の行事としては、5月「花まつり」、3月「子ども報恩講」を行う。さまざまな考え方の保護者が子どもを入園させているので、親が絡んだ行事には宗教行事はいれないようにしている。

4）Ｄ保育園の特徴

Ｄ保育園は、市街地から少し外れているが、高速道路や国道が近隣を走り交通量が非常に多い。反面、園周辺には川も流れ、田園風景も広がりのどかさも感じられ、自然にも恵まれている。

保育目標は、楽しく遊べる子「共に生き、共に育ち合う保育実践をスローガンに、命の尊さ・思いやりの心を遊びをとおして育てます」である。

Ｄ保育園のホームページをのぞくと、「こんな保育園にしたい＝こんな子どもに育てたい」ということが各立場から述べられている。

理事長は、「おんぶに　だっこに　添い寝　「みんな　良い子だよ！！」と子どもたちに話しかける。大切な子どもさんを"思いやり豊かな子ども"に育てましょう」と述べている。

園長は、次のように述べている。

働く保護者に代わり、保育をする保育園。保育園では、できるだけゆったりとした時間が流れ、子どもにとって、あたたかく居心地のよ

い場所になるように、全職員で共通理解を図っていきます。キーワードは「子どものため」という考え方を家庭と保育園とで持ち、連携をとって、一緒に子育てしていきたいと思います。

保育園は、子どもたちの心の土台を育てる大切な時期に生活する場です。

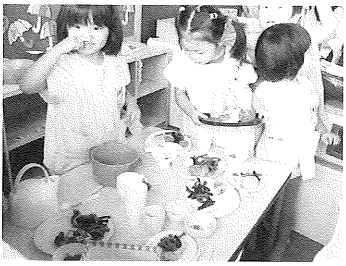
見守る立場としての責任を感じます。子どもたちには元気さ（＝主体性や自主性）、素直さ（＝失敗しても助言により立ち直る、頑張ってみる）を持って、楽しく遊べる子（満足感を感じるまで遊びこめる子）になって欲しいと願っています。子どもたちの健康・安全の面に常に緊張感を持ち、目を配り、気を配り、心配りをしてまいります。

主任は、「善悪の判断がつき、ルールを守ることで、友だちとも仲良くなれたり、遊びが楽しいと思えるように育てたい。挨拶ができる子、ハイと返事ができる子にしたい。」と述べている。

職員は、「●子どもの心が安らぐ場でありたい。●心が安定して生活できる園でありたい。●「明日も早く保育園へ行きたい」と言えるような保育園にしたい。●元気に学んで遊べる場をつくるよう心がけたい（善悪・ルール・危険）。●人や物に対する思いやり、やさしさを育てたい。●少々の事ではくじけないたくましさを育てたい。」と述べている。これらの内容から、この園での子どもを育てる各立場の思いが理解できる。

自主活動の環境もさまざまに工夫され、保育室には、各年齢の発達に合った保育者の手作り教材が設定されている。この環境構成は、子どもたちが自発的に遊ぶ姿を生み出し、友だちとの関わり合いを導き出している。また、乳児クラスの保育の中に取り入れられた身体表現遊びは、身体機能の高まる要素が多く含まれていた。保育者も一緒に遊び、ともに育つ要素も工夫されていた。

宗教的行事はあまり日常保育には見られないが、月一度の誕生会時には



（友だちと共に育つ
4歳児自主活動場面）

（友だちや保育者と共に育つ
2歳児一斉保育場面）

お参りをしたり、仏教の歌「仏様」を歌ったりする。「花まつり」は、隣接する寺の本堂に行き行う。11月には、「報恩講」を年中・年長児が参加して御経も読む。2月いっぱい園で御経の練習をして、3月にはバスに乗って三河別院で行われる「報恩講」に園児は参拝する。

5）E保育園の特徴

E保育園は、市街地より少し離れた所に立地しているが、住宅が多く園の定員も200人と保育ニーズは高い。「手を合わす子に　じょうぶなからだと　やさしいこころ」をコンセプトに、自然のなかで子どもたちの心を豊かに育てる保育の実践を行っている。数々の年中行事や仏教行事により、子どもたちは遊びながら、伝統文化に興味を持ち、関心を示すように導いている。

保育理念は、「ともに生き、ともに育ちあう」とし、「●児童福祉法に基づき保育に欠ける全ての子どもにとって、もっともふさわしい生活の場を保障し、愛護すると共に、最善の利益を守り、保護者と共にその福祉を積極的に増進する。●地域の子育て家庭に対して、さまざまな人や場や専門機関などと連携を図りながら、保育の専門性を生かし、地域に開かれた子育ての拠点としての役割を果たしていく。」という保育方針をあげている。また保育目標は、「●命の尊さと生きる喜びを感じ、安全に行動できる力

を養う。(生命尊重)、●自然を愛し、社会の恵みに感謝する心を育てる。(報恩感謝)、●友だちを大切にし、互いに協力して遊ぶ態度を養う。(和合精進) ●何事も自分で考え、やり遂げる態度を養う。●豊かな表現をとおして、美しく創造工夫する態度を養う。」としている。

理念、方針、目標から真宗の教えを大切にして保育実践を展開していることがわかる。週の初めに「月曜集会」を本堂でおこない、園長を中心に御経が読まれる。保育者が回り番で真宗にかかわる内容（ともに生きることや命の尊さや報恩感謝など）を工夫して話している。この時、3歳以上の子どもたちは "念珠" と "おつとめ帳" を保護者手作りのバッグに入れて参加する。

日常的な保育は、宗教色を色濃く展開しているわけではない。さまざまな体験や経験ができる保育展開を心がけている。

「真宗保育」行事としては、入園式、卒園式を隣接する寺の本堂にて行うということである。

「花まつり」は、父母の会総会を兼ねてお花を飾り、甘茶の接待をする。「七夕」は、一般的な取り上げ方をしている。12月には、「報恩講」を保護者の参加で行う。お参り、献花、人形劇などが催され、子どもたちは精進料理を食べる。保育者は、子どもの見方、接し方を学び保育観をそろえ「ともに育つ保育を実践」している。

6) F保育園の特徴

F保育園は、自園を保護者に向けて公開する要覧に「1954（昭和29）年、寺の境内に誕生しました。仏教精神を根底においた保育は誕生以来受け継がれています。O市の街の真ん中に位置し商店街住宅街の中にあります。散歩する距離には、遊歩道や公園、学校があり、身近な動植物に触れ、小さな発見や出会いをしています。また、社会や家庭のニーズにそった子育て支援を取り入れています。」と記している。

保育理念においても、「"今、ともに生きともに育ち合う保育を実践しましょう" 仏様が見守る中、家庭的な雰囲気を大切にし、こどもの主体的な成長を見守り、子ども、保護者、保育者がともに育ち合う保育を行っています。」と説明している。

保育方針は、「●命の尊さと生きる喜びを感じ、自分や友達を大切にのびやかな心と体をつくります。●自分で考え実行し、判断する力、相手に伝える力や好奇心、探究心を育てます。●自然豊かな「あそび環境」を整え、豊かな感性を育て創造力の芽生えを養い、意欲的に活動する体験保育をします。」である。

3・4歳児は、混合保育を実施しており、4歳児にあこがれたり、刺激を受けたり、模倣したりして興味や関心を示しながら育つ3歳児の姿、年下の子の面倒をみたり、相手の気持ちを知ったりして、思いやりの心が育つ4歳児の姿を描いて保育が展開されている。5歳児は、年齢の発達を大切にした横割り保育を中心に実施しているが、互いに助け合ったり思いやったりする中で、自主性、協調性、責任感などを養うことや人と関わる経験を豊かにし、友だち関係を広める異年齢保育の実施も保育内容に合わせて体験する。

誕生会の日には、3・4・5歳児の誕生児保護者が園に来て、誕生児の紹介の中で誕生や子育てエピソードを話したり、一緒に好きな保育室で食事をしたりする活動が企画されている。

「真宗保育」関連の行事では、毎週月曜日に集会をおこない、生活や命について大切なことを確認し合っている。

4月は「花まつり」、7月は「盂蘭盆会」、12月は「成道会」、1月は「報恩講」、2月は「涅槃会」、そして3月には、「三河別院参拝」を行っている。

お釈迦様が言われた「人間としてうまれたことの大切さを喜び合いましょう。そして命を大切にし、精一杯生きていきましょう。」ということを保護者や子どもたちに伝え、仏教精神を基盤として保育している。

7）G保育園の特徴

G保育園は、O市の北東部にあり、自然がいっぱいで、四季の変化を肌で感じることができる。

職員構成は、若手からベテランまで各年齢層を配置し、丁寧な保育で多面的な保育内容が展開されている。先輩保育士の姿をみて、拝むことや手を合わせることを学ぶ環境を保育士の資質向上につなげている。「地域のために」と一大決心をして創立した時の保育目標は、「よい環境のもとで、心の豊かな子どもを育てましょう」とし、ていねいな保育、一人ひとりに親切な対応を心がけ、その精神を貫いて現在に至っている。

保育者の手作り教材による環境構成からは、温かな保育が展開されていることが伝わる。

また、地域のお年寄りを招いてお茶会や交流会を企画し、世代間の触れ合いを図って「ともに生き、ともに育つ保育実践」の工夫をしている。

「真宗保育」の行事としてG保育園が取り上げているのが、「花まつり」と「報恩講」である。5歳児の3月には、「三河別院報恩講参拝」がある。

「花まつり」は、花御堂を作るところから子どもが参加し、地域のお年寄りを招き、お茶の接待などをしている。地域と一体となった子育てを目指し、行事を通して楽しめる工夫が各所にされ「ともに育つ保育実践」をしている。

（保育者が工夫した環境設定の一部）

(4) 聴き取り調査内容から真宗保育を考察する

7園の保育内容に見る「真宗保育」の特徴として、どの園もその取り組み方には違いはあるが、「真宗保育行事」を取り入れていることである。

また、お参りすることや御経をあげることなどの体験がされている。歌や絵本も行事の時を利用して、仏様に関した歌がうたわれ、命の大切さを伝えるのに本協会が提供している内容の本や教材などが基本的に利用されている。それが子どもたちに真宗の教えを伝える体験となっていることも7園を見学することでわかった。しかし、お参りや御経、歌などは他の仏教園でも同じようにされていることだと考えられる。「真宗保育」の実践は、子どもと保育者の関係性において、ともにお参りすること、ともに御経をあげること、ともに歌をうたい、ともに絵本をみるなかで、何をどのようにともに感じ合えるのか、ともに学ぶかなのではないだろうか。保育の実践のなかで、一緒にいる子ども同士、子どもと保育者が同じ体験をする。「真宗の教え」をもとに、ともに学び合うことで互いが自己形成に必要なことを自ら学びとることができると気づける体験を意味するものである。『真宗保育のカリキュラム入門』では、ともに生き、ともに育ち合うことを「心は開放されて、そこから自らも学ぶことが始まり、どんな相手も自分に影響してくれる間柄であったと気づかされ、どの人も大切な存在だと知らされていくようです。そうした世界を、「ともに育ち合う」といっているのです。」(2010. 大谷保育協会. P17) と伝えている。保育園という集団の場では、一緒に体験する人がいる、一緒にこの話を聞く人がいる、一緒にこの歌をうたう人がいるのである。人とコミュニケーションをとりながら見聞きすることが意味をもち、保育実践の中で一諸に体験することが必要なのである。「ともに」は、寄り添いあう人の存在を抜きには考えられないことであり、相手がいることや一緒に過ごす人の大切さを子どもも、保育者も気づき感謝することからはじまる保育実践を意味するのであると考えられる。

1）真宗保育に関わる園行事についての考察

「真宗保育」の行事として、見学した7園ともが取り上げているのは、「花まつり」と「報恩講[9]」である。なぜこの時期に、なぜこの2つの行事が取り入れられるのかを『仏教保育総論』（チャイルド．2010.）と『真宗保育のカリキュラム入門』（大谷保育協会．2010.）を参考に考察する。

『仏教保育総論』には、「それぞれの寺院、仏教系の幼稚園・保育園で行われる仏教行事は種々あるが、代表的なものは、世界中の人々が幸せになるための「教え」を説かれたお釈迦さまの、生涯の節目の日にちなみ行われる三仏忌[10]である」（2010．チャイルド．P58）と記載されている。

三仏忌とは、「降誕会」、「成道会」、「涅槃会」のことである。

「降誕会」は、お釈迦様のお誕生を祝う日で「灌仏会」ともいう。一般には、4月8日におこなう「花まつり」として知られている。

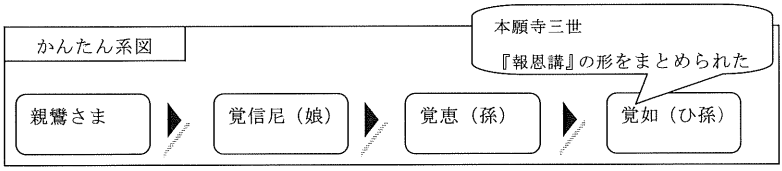
「花まつり」は、お釈迦さまの誕生をお祝いする行事であるが、お釈迦さまと私たち（他の誰とも比べる必要のない "わたし"）、そしてあらゆる "いのち" の尊さを知る行事だからこそ、入園当初に行う意義がある行事なのだということが考えられる。

次に、見学したどの園でも取り上げられていた「報恩講」について文献を引用して記載し、なぜどの園でも取り上げていたのかを探る。『報恩講をつとめましょう―真宗保育カリキュラム行事編「報恩講」より―』（大谷保育協会．2011.）を参照し、「報恩講」について理解を深めるために以下に記載する。

> 「報恩講」とは、「親鸞さまは、1262（弘長2）年の11月28日に、京都で亡くなられました。90歳の生涯でした。報恩講は、その親鸞さまのご命日である毎年11月28日に行われる仏教行事です。そもそもは、親鸞さまのお弟子さまたちが，ご命日の法要を行っていたことにはじまります。その後、親鸞さまのひ孫で、覚如さま

（1270～1351）という方が、「報恩講私記（ほうおんこうしき）」をあらわしてから、行事のかたちができたと言われています。

〈図－1〉



〈図－1〉は、『報恩講をつとめましょう－真宗保育カリキュラム行事編「報恩講」より－』を参考に作成した。［作成＝平野仁美］

また、『報恩講を努めましょう』において、行事の意味を次のように説明している。

「報恩講」という行事は、真宗に出会った人々が、長年にわたり今に生きる私たちにまで受け継がれてきた大切な行事です。なぜ真宗に出遇った人々は、この「報恩講」を大切にしてきたのでしょうか。それは、日々の社会の中で生きる私たちが、あらためて親鸞さまの教えを通して確かめるためです。まずは「報恩講」という言葉から確かめてみましょう。あらためて親鸞さまが私たちに明らかにしてくださった「真宗」は、「私たち一人ひとりが、いきいきと生きる歩み」を獲得することだと確かめましょう。

真宗⇒私たち一人ひとりが、空しい人生をひるがえし、
いきいきと生きる歩みへと変わっていく教え。

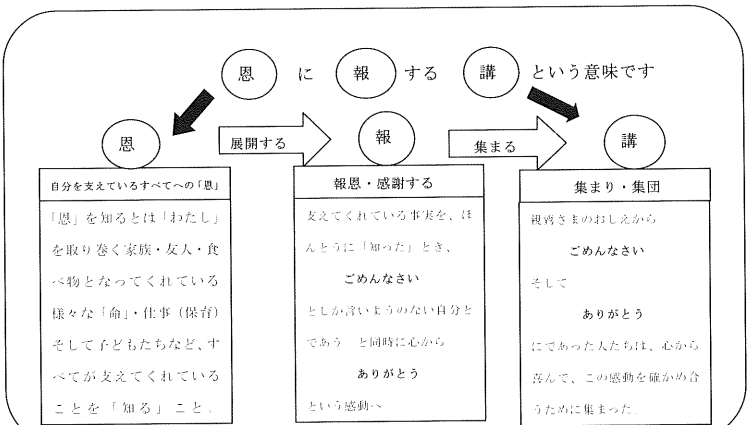
そして、「真宗保育」とは、親鸞さまが明らかにしてくれた仏教に立った保育実践であり、子どもたちにいつまでも「いきいきと生きてほしい」と願う保育実践です。

「真宗」への学びは自分自身の「事実」とであい、「空しく人生を過ごしたくない！」という意欲を育み、培っていく学びであり、育ちです。この育ちは宗教的情操の一つの育ちです。そして保育者自身が日々の保育実践、つまり子どもたちへの関わりという具体的な事柄をとおして宗教的情操の育ち直しをするのです。それが真宗保育の独自の「はたらき」です。そのためには「わたし」自身と深く向き合った振り返りが大切です。なぜならば「わたし」と深く向き合わなければ、「事実」とであえないからです。そして「わたし」は、自分の視点や価値観によってしか、あらゆるもの、すなわち「子どもたち」とも関われていないという問題があるからです。

この私たちがかかえている問題を親鸞さまから教えていただいているからこそ、真宗保育は、一人ひとりが自分と深く付き合うことを大切にし、常に実践していけるのです。（……中略、）親鸞さまは、「空しく過ぎ去っていく人生」の「事実」を確かめ、向き合い、そして自分自身を護摩化さず見つめ、しっかりと力強く、いきいきと人生を歩まれたのでした。ここに真宗保育が育む「生きる力」の原点があります。それはあらゆる人びとが人間として生きていく「生きる力」の原点なのです。このことを「報恩講」をとおして保育者自身が確かめ、子どもたちといっしょに育っていってほしいと願われているのです。

次頁（図－2）の内容を参考にしてみると、「報恩講」は「真宗」における行事であり他の仏教には見られないものである。なぜならば、「報恩講」は、親鸞の命日の仏教行事だからである。親鸞は、仏教を浄土真宗としてあきらかにし、その教えを広めた宗祖である。「親鸞さまの教えをいただいたご恩に感謝をもって報いる講」として「報恩講」と名づけられたということから、「真宗」以外の宗派にはない行事だということがわかる。

〈図－2〉



〈図－2〉は、『報恩講をつとめましょう－真宗保育カリキュラム行事編「報恩講」より－』を参考に作成した。［作成＝平野仁美］

「真宗に出遇えてよかった。あなたが生まれたことを喜び、人生を精一杯生きることを願っています。」という親鸞の教えは時代を超えて人々に生きる力を与え続けているからこそ保育園でも大切にされている。本協会所属園ならではの行事であり、「報恩講」をおつとめすることで「ともに生きともに育つ保育実践」をしていくことになると考えられる。

見学した7園が「花まつり」と「報恩講」を園行事として、子どもたちに体験させたかったわけは、仏教を伝え、みんなは尊い存在だと知り、出会ったすべての人を大切にし、ともに生きることで困難に立ち向かい乗り越えていける「生きる力」を仲間と支え合うことを園生活の中で身につけて欲しいという願いから、園行事に取り入れているのだと考えられる。

園の行事として取り上げることで、保護者にも参加してもらい、「ともに育つ保育実践」としてその方法を工夫している。各園が共通している点は、自園のおかれた環境、保護者の質的要素をよく考えて、どんな方法なら自然に保育実践に取り込めるのかを吟味していることである。

2）お参りについての考察

お参りの取り上げ方は各園さまざまであるが、7園ともに子どもと保育者が本尊もしくは、親鸞聖人像または、親鸞聖人の童子像を前にして手を合わせ拝むという行為を大切にし、お参り、御勤めとして御経をあげている。おもな仏事[11]の時に正信偈[12]（正信念仏偈）をあげる。

『真宗保育カリキュラム入門』では、合掌・礼拝について「私たちが日常行っている「手を合わせて頭を下げる」という形のものとは、イスラム教などの礼拝の仕方（五体投地）からきているといわれています。」（大谷保育協会．2010．P43）と述べられている。手を合わせ、頭を下げることは、精神安定の効果や自己反省するのに最もよい姿勢だと言われている。仏教園では、お寺の境内に隣接して保育施設が建てられていることが多い。仏様に見守られながら、安心して遊べる場所が保育園である。登園から降園までにさまざまな形で、手を合わせ、拝むことで感謝をしたり、お願いしたりすることが多いと考えられる。日常のちょっとした出来事に保育者とともに感謝し、お礼を言っている場面が「真宗保育」の実践現場には多くみられる。友だちと出会えたことへの喜びの伝えあいが「ともに」この場で出会い楽しい時間を過ごせたことに「ともに」発見や工夫をしたことで多くの学びがえられたこと、集団の場で一緒に暮らし、支え合ったり、助け合ったりしながら自他ともに成長することへの感謝をこめて、お参りをしている。見学した7園のほとんどが何らかのかたちで、子どもは保育者とともにお参りを体験している。月に一度の集会や誕生会企画の中にお参りを入れている園は2園であった。毎週月曜日にお参りを入れている園は、3園であった。毎日お参りをしている園は2園であった。合掌・礼拝によって、生かされていることに気づかされるということが「真宗保育」のなかで言われている。そして、ともに生きる仲間の存在にも気づくのである。

3）保育課程からの考察

本協会の保育に対する根本理論は『真宗保育カリキュラム』によって説明されている。しかし、今回見学したどの園も国が告示している「保育所保育指針」を基に保育を考えていることが「保育課程」を編成していることからわかる。そして『真宗保育カリキュラム』を「保育課程」の編成を行う際に、保育理念や保育目標、保育の方針などをあげるのに役立てていることが各園の「保育課程」の内容から読み取ることができる。ここでは、各園の保育課程の中に書き込まれている「保育理念」や「保育目標」に、「真宗保育」としての要素がどのように取り入れられているのかをみていく。

① A園の「保育理念・保育目標・保育の方針」内容

A園の保育理念としてあげられている「つよく、あかるく、なかよくのびる」は日本仏教保育協会が仏教保育の根源として示している「仏教保育三綱領」を園児たちにわかりやすく表現したものである。

三綱領とは、「慈心不殺（じしんふせつ）」（生命尊重の保育を行おう）、「仏道成就（ぶつどうじょうじゅ）」（正しきを見て絶えず進む保育を行おう）、「正業精進（しょうぎょうしょうじん）」（よき社会人をつくる保育を行おう）のことである。

そして、三綱領を園児たちにもわかりやすいように表現したものが明るく（慈心不殺（じしんふせつ））、正しく（仏道成就（ぶつどうじょうじゅ））、仲良く（正業精進（しょうぎょうしょうじん））である。この基になった考えは「三宝を敬う」ということである。そして、これは全ての宗派に共通した理念で、仏（お釈迦さま＝仏教の創始者）、法（達磨＝教養の中身）、僧（僧伽（さんが）＝仏教の実践者、会社でいう社員のようなもの）というこの三宝を大切にすることである。

方針では、「真宗保育」のテーマを変形したものが使われている。保育目標は、「生命の尊重」、「報恩感謝」、「和合精進」があげられ、仏教園ならではの内容を包含した「保育課程」が編成されている。

② B園の「保育理念・保育目標・保育の方針」内容

B園は保育理念、保育方針などの書き込みがなかった。

保育目標は、仏の子として、強く、明るく、仲良くのびるとA園と同じ三綱領を園児たちにもわかりやすいように表現したものが使われている。この点は、仏教園らしい目標が立てられている。

③　C園の「保育理念・保育目標・保育の方針」内容

C園の保育理念、保育目標、保育方針からは、仏教園という内容の記述はない。むしろ、「保育所保育指針」や「児童福祉法」が意識された内容になっている。

④　D園の「保育理念・保育目標・保育の方針」内容

D園は特別に「真宗保育」や仏教的要素を包含しておらず、ごく一般の保育内容から保育課程の編成がされている。

⑤　E園の「保育理念・保育目標・保育の方針」内容

E園は、保育理念に「真宗保育」理念が使用されている。保育方針は、一般的な内容で構成されている。保育目標からは、「生命尊重」「報恩感謝」「和合精進」という仏教保育のねらいが示されている。

⑥　F園の「保育理念・保育目標・保育の方針」内容

F保育園は、保育理念で「真宗保育」理念が書き込まれている。保育方針や保育目標も「命の尊さ」「感謝」という文言がつかわれ、仏教の教えを生かした内容となっている。

⑦　G園の「保育理念・保育目標・保育の方針」内容

G園は、「仏教保育」や「真宗保育」は考慮されていない。「保育所保育指針」や「児童福祉法」を意識して編成されている。

見学した7園は「保育課程」を編成するときに、園ごとの差異がある。仏教教育を意識して理念・方針・目標が編成されている園と、あえて「保育所保育指針」や「児童福祉法」を意識し編成している園があった。「保育課程」には、「真宗保育」の色があらわれてくると推測していたが、仏教行事をとり入れた保育内容というより、子どもの発達を意識した内容になっていることに気づいた。

4. まとめ

本稿は、「真宗保育」とは何かや、「本協会のめざしてきたもの」について本協会発行の『真宗保育カリキュラム』や『真宗保育』などから確認し、本協会所属O市7保育園の保育実践見学を通し、「真宗保育理念」や「総合テーマ」がどのように実践されているのかを聴き取り調査や園見学を通して考察したものである。

今回は、各園の見学を通し作成した資料を基に、各園の開設時期や立地環境からの考察、見学を通して読み取った園の特徴から「真宗保育」に関わる行事としてどのようなものがあるのかを調査した。その結果、「花まつり」と「報恩講」がどの園でも取り上げられていることがわかった。そして、釈迦や親鸞の教えに触れ行事を体験する過程において、ともに育つことの内容を考察した。聴き取り調査により、「真宗保育」関連行事の内容やその実践の方法を知ることができた。

また、見学した7園ともに何らかのかたちで、お参りを子どもとともにしていることがわかり、その意味や特色ある各園のお参りの方法を知ることもできた。

また、「真宗保育」のなかでいう「ともに育つ保育」を実践するためにどの園も、保育者が手作りで環境を構成し、自ら遊びたくなる環境や子ども同士が自然に関われる環境の工夫をしている様子を見ることができた。子どもたちのために保育を行う保育者の姿勢の中に「ともに生きようとする」保育者の願いや思いが内在し、温かさもしっかり伝わってきた。どの園でも保育の工夫が各所にされ、子どもとともに過ごす場の居心地の良さを追求することで、「ともに生きともに育ち合う保育実践をしよう」とする保育者の姿があった。落ち着いた雰囲気や保育者の笑顔は、子どものたちの情緒を安定させ、養護の行き届いた状況が伝わった。保育者が常に寄

り添い安心できる雰囲気が醸し出されていた。その雰囲気は「真宗保育」の教えを包含し、友だちとコミュニケーションをとりながら遊び、人間関係が育っていくのに欠かせないものであると考えられる。今後も「真宗保育」現場に出向き、「ともに生き、ともに育つ保育実践」の内面理解を深めていきたいと考えている。

[註]

1 加盟園数：約500の幼稚園・保育園・こども園。活動内容：真宗保育理念「本願に生き、ともに育ちあう保育」・総合テーマ「ともに生きともに育ちあう保育を実践しよう」のもと、保育、幼児教育の振興に寄与することを目的とし、活動をおこなう。

2 「真宗の育の理念の宣言」については、2008 copyright (c) OTANI NURSERY SOCIETY, all right reserved. copyright (c) 大谷保育協会. All rights reserved. に掲載。

3 「理念から問われるものについては、「保育」は人と人との関係における営みであり、「悩み」と「うなずき」の連続です。その無数の事柄を受け止めていくには、環境を改善したり相手を説得したりする対処的な方法では本質に届きません。「ともに育ちあう」という事柄が、私たちのどこで、そしてどのように成立するのか、ということを確かめることが必要になります。本願に触れてとき、ひとは保育の営みを通して、「人間とは、私とは」という問いにであい、すべての事柄が「私の課題」として見出されます。そこに、真宗保育（「本願に生き、ともに育ちあう保育」）の実践があります。」

4 「本紙は、真宗大谷派の機関誌『真宗』に「幼児教化のページ」として掲載して頂き、その内容は社団法人大谷保育協会に任されてきました。更に、そのページを別刷りにして『真宗保育』紙として関係各方面に送ることを許可して頂き、その数は毎号3,300部となっています。『真宗』誌と『真宗保育』紙との掲載は、宗教法人「真宗大谷派」と社団法人「大谷保育協会」との差異はあっても、人間理解の根本に真宗仏教を仰ぐことは、全く同じであることを表わします。」（『真宗保育』№200, p.1）

5 「真宗保育とはなにか」の解説文は、ＰＤＦファイル 2008 copyright (c) OTANI NURSERY SOCIETY, all right reserved.に掲載

6 大谷保育協会の沿革は、明治以前、各寺院の「寺子屋」としての活動にさかのぼる。明治30年代、各地に寺を開放した幼稚園が開設される。1925（T14）

年、第一回大谷派保育大会開催。昭和初期、農繁期託児所が各地に運営される。1949（S24）年、大谷派保育協会発足。1951（S26）年、第1回大谷保育協会全国大会開催。1957（S32）年、第1回仏教保育大学講座（於：東本願寺議事堂）開催・東西両本願寺共催（後に真宗十派共催）。1977（S52）年、第1回大谷保育研究集会。1979（S54）年、大谷保育協会・社団法人となる（文部省認可）。1990（H2）年、真宗保育研究所開設。

7 「本願に生き、ともに育ちあう保育」

8 大谷保育協会所属園の幼稚園・保育園・その他施設数は、北海道（33）、青森県（8）、秋田県（2）、山形県（16）、岩手県（1）、宮城県（2）、福島県（3）、東京都（9）、神奈川県（6）、埼玉県（1）、茨城県（6）、栃木県（3）、山梨県（1）、長野県（6）、愛知県（68）、静岡県（3）岐阜県（39）、新潟県（42）、富山県（13）石川県（18）、福井県（7）、京都府（20）、奈良県（6）、滋賀県（10）、大阪府（22）、兵庫県（10）、広島県（6）、香川県（1）、宮崎県（5）、大分県（21）、福岡県（64）、鹿児島県（22）、熊本県（27）、佐賀県（1）、長崎県（21）、鹿児島県（22）である。

9 報恩講について、『真宗保育のカリキュラム入門』（2010. 大谷保育協会）では、以下のように述べている。（2010. 大谷保育協会. P66）

報恩講は、宗祖親鸞聖人がお亡くなりになった御命日である11月28日（新暦1月16日）を中心に行われる法要で、「御正忌」と言われることもあります。報恩講は文字どおり聖人の御恩に報いるという、一年のうちでもっとも大切な集いですが、私たちが親鸞聖人からいただいていることはなんなのでしょうか。親鸞聖人は、徹底的にご自身を内省され、自分の力でなんとかしようとすれば絶望するしかない事実につきあたられました。また、誰もが条件（縁）次第では、どんなことをもしてしまう存在であると自覚されました。そこから「愚禿（おろかなもの）と名告るしかない自分であるが、その自分こそ救おうとはたらく如来の本願に出遇われました。そこに立つと、生活の中の悩みや苦しみは障りではなく、すべてのことが真実になっていく。だから目の前のことから逃げずに、ちゃんと見ていきなさい。どんなことに出遭っても大丈夫だと言われています。私たちはすぐ自分中心の考え方に立ってうろうろしてしまいますが、真実の教えがせっかくここまでとどけられているのですから、聖人の明らかにされた南無阿弥陀仏のいわれ（いのちの促し）に聴き、あらたに確かな歩みをしていきたいものです。

10 三仏忌とは、4月8日降誕会（花まつり）は、お釈迦さまの誕生を祝う日であり灌仏会ともいう。12月8日成道会はお釈迦さまが悟りを開かれたことを祝う日のことである。2月15日涅槃会は、お釈迦さまがお亡くなりになった日

であり、お釈迦さまの生涯の節目の日にちなんだ行事である。

11　真宗大谷派のおもな仏事は、1/1 修正会、2/15 涅槃会、2/15 聖徳太子御命日、3 月 18 日～24 日春の彼岸 3/25 蓮如上人御命日、4/1 親鸞聖人御誕生会、4/8 お釈迦さまの御誕生会（花まつり）7 月（8 月）14・15 お盆、9 月 20 日～26 日秋の彼岸、11 月 21 日～11 月 28 日報恩講、11/28 親鸞聖人御命日（御正忌）12/8 成道会

12　正信偈とは、真実の心南無阿弥陀仏の歴史の詩である。

【参考文献】

・『真宗保育のあゆみ－大谷保育協会社団法人設立 30 年－』社団法人本協会、2008 年

・『真宗保育』＜1 号～349 号＞（社団法人大谷保育協会）1982 年～2011 年

・平野仁美『大谷保育協会の「総合テーマ」についての研究―『真宗保育』を中心に―』、同朋大学社会福祉学部『同朋福祉』第 18 号、2012 年

・2008 copyright (c) OTANI NURSERY SOCIETY, all right reserved.

・民秋言『幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷』、萌文書林、2010 年、第 3 版

・（社）日本仏教保育協会『改訂わかりやすい仏教保育総論』、チャイルド本社、2010 年改訂第 1 刷

・『真宗保育のカリキュラム入門』社団法人本協会、2010 年、4 刷

・『保育学大事典第 1 巻』第一法規出版株式会社、1983 年、初版

・中垣昌美・村井龍治・滝村雅人『大正期仏教児童保護事業の動向―保育事業と日曜学校の関わりから―』、日本仏教社会福祉学会、年報第 24 号、1993 年

・社団法人大谷保育協会『報恩講をおつとめしよう－真宗保育カリキュラム行事編「報恩講」より－』、2011 年

※　同朋福祉編集委員会規定により「調査報告」としての査読済み

（特別任用講師：保育原理・保育内容総論）